英潮社新社・英文学叢書

ハーディの小説

——その解析と鑑賞——

中村 志郎
著

英潮社新社
EICHOSHA SHINSHA

ハーディの小説

—その解析と鑑賞—

著 中村　志郎

江苏工业学院图书馆
藏书章

英潮社新社

著者略歴

中村　志郎（なかむら　しろう）

1933年　石川県生まれ。
1956年　金沢大学法文学部文学科英米文学専攻卒業。
現　在　金沢大学教養部教授。
　　日本ハーディ協会会員。

住　所　920-01　金沢市南森本町わ81－4

ハーディの小説—その解析と鑑賞—

1990年10月5日　初版発行　検印廃止　定価3,000円（本体2,913円）

著　者　中　村　志　郎
発行者　土　岐　省　三

発行所　㈱ **英潮社新社**
東京都千代田区神田神保町2-28日下ビル（〒101）
電話 東京（263）1641（代）・6171 番
振替口座・東京 7-55407 番

〔電植・印刷・株式会社キャップス〕　ISBN4-268-00000-3

目　　次

第1章　短篇“Old Mrs Chundle”などの読み方 …… 1

第2章　Hardyの民衆
——*Under the Greenwood Tree*の場合—— ……17

第3章　Bathshebaの性格描写の方法
——*Far from the Madding Crowd*の一考察—— ……37

第4章　*The Return of the Native*の問題点 ……57

第5章　*Two on a Tower*の悲劇性 ……76

第6章　*The Mayor of Casterbridge*と*Les Misérables*
——その比較的考察—— ……101

第7章　Grace Melburyの心理と行動
——*The Woodlanders*の一考察—— ……113

第8章　*Jude the Obscure*の幾つかの問題 ……133

第9章　悲劇としての*Tess*の評価
——一つの試み—— ……152

第10章　「テス」と「戯曲テス」 ……163

あとがき ……186

索　引 ……189

作品名略号 ……196

第1章

短篇 "Old Mrs Chundle" などの読み方

Thomas Hardy (1840-1928) の作品集としては従来からマクミランのポケット・ハーディが，テクストや造本や簡便さから最も重宝されてきた。小説だけについては戦後グリーンウッド版なども出されたが，いま一つもの足りない感じであった。そこへ先年来刊行されてきたのが The New Wessex Edition で，この版では長篇小説が従来のものと同じく14冊に，ポケット・ハーディでは7冊であった詩集が全1巻に，2冊だった *The Dynasts* も1巻にまとめられた。一方短篇小説はこの版で3冊にまとめられたが，従来の4つの短篇集がそのうち2冊を占め，残りの1冊には主としてこれまで全集に取り入れられていなかった作品がまとめて収められた*。この3冊目の作品を次に列挙してみる。

1. "Old Mrs Chundle"
2. "Destiny and a Blue Cloak"
3. "The Doctor's Legend"
4. "An Indiscretion in the Life of an Heiress"
5. "Outlines for Stories"
6. "The Thieves Who Couldn't Help Sneezing"
7. "Our Exploits at West Poley"
8. "The Famous Tragedy of the Queen of Cornwall"

以上のうち8番目の詩劇だけはポケット・ハーディにも入っており，「ディナスツ」2巻目中に収められていて，これは今までも手に入り易かった。6と7は子供向きのもので，6はごく短いユーモラスなもの，7は中篇で，「トム・ソーヤ」を思わせる冒険物語であるが，戦後オクスフォードから単行本で刊行されて，入手も可能であった。5は標題の通り，ハーディが作品制作

* 本書で扱う Hardy の作品からの引用頁はすべて，この The New Wessex Edition での頁である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の為にあらかじめ用意したメモで，手法的な工夫など読者の興味をひくものである。しかし私がこれから扱おうとするのは1—4の中短篇小説で，これらは執筆当時などに雑誌掲載されたが，何らかの理由でハーディが従来の4短篇集の中には入れず，単行本として復刻されたことはあっても，われわれ読者の目には概して触れにくかった作品である。そしてこれら4篇は，私見によれば，それぞれに特色あるものであり，出来ばえから言っても，従来読まれてきた多くのハーディ中短篇に比較して遜色なく，むしろそれらの作品群中で大きな重要性をもっているようにさえ思われる。作品としてのそのような重要さや意義を捕捉しながら，4作それぞれの読み方を考えてみようと思う。

§1　"Old Mrs Chundle"

これは8頁のごく短い作品で，1888—90年頃，ハーディ50歳頃の執筆であるが，発表されたのは彼の死の翌年1929年で，夫人の手によりアメリカの雑誌に掲載され，同年ニューヨークで限定出版されてもいる。F. B. Pinion の *A Hardy Companion* は，ハーディの親友ホレス・モールの長兄ヘンリーがモデルの，実話が素材になっていると言う[1]。粗筋をまとめてみよう。

新任の牧師補が水彩スケッチに遠出し，夢中に写生するうち昼どきになって空腹を感じ，とある百姓家で何か食べる物を求める。一人住まいの老婆は，はじめ警戒の様子であったが，このようなものでよければと，野菜とベーコンの食事を提供する。その新鮮な美味に満足した牧師補はお礼をしたいと言うが，老婆はいらないと断り，押し問答の結果ようやく2ペンスだけ受け取る。別れ際の話では老婆は2週に1回マーケットに，週に一度教会に出かけるほかは外出することもないと言う。牧師補が教区牧師に会ってこの話をすると，チャンドル婆さんならここ13年間教会に現われたことはないと，くすくす笑う。使命感に燃えた若い牧師補が再びチャンドルを訪れ，教会に来ないことは残念だと言うと，彼女は週一回教会へ行くと言ったのは言葉のあやで，耳の聞こえないこの身が教会へ行っても無駄なことなのだと答える。熱心な牧師補は補聴器を用意するからと言って是非礼拝に出るように誘う。次

の日曜日，教会内の正面に大きく輝くラッパは会衆を驚かせるが，あとでチャンドルは何の効果もなかったと言い，自腹を切った牧師補を失望させる。しかし彼はくじけず，今度は説教壇から一番近い会衆席まで伝声管を通す案を立て，チャンドルに礼拝出席を求める。次の日曜朝，牧師補が壇に立つと，伝声管方式は効を奏しているようなので喜ぶが，やがて管を通してチャンドルの口から発する玉ねぎシチューと思われる強いにおいが上がって来て，それに耐えられなくなり，薄地のハンカチを管の口にそっと落とす。すると下から「管がつまった」というささやきが聞こえ，構わず説教を続けていると，やがて突然暖かい風と共にハンカチが管から吹き上がり，壇の床にゆっくり落ちて行き，二階席の合唱隊の少年たちがこの「奇蹟」に笑い出す。チャンドルが下から管に強く息を吹き込んだからであった。再び説教壇にはにおいが充満し，牧師補は説教を続けながらそのにおいを分析するが，また我慢ならなくなり，今度は管の口を指で押さえ，老婆はまた息を吹き込んで管の通りをよくしようとし，かくしてその日の説教は中途半端なものに終ってしまう。このようなことがあって牧師補の熱意もいささか冷却したが，次に老婆に会うと，伝声管はよく聞こえたが，これからはハンカチをうっかり上に置いたりしないで欲しい，日曜には欠かさず出るからと言い，またときどき家に来て聖書を読んで欲しいと頼む。次の日曜日の朝，またも試練がくり返されて，彼は教区牧師に相談すると，教区の人間を知らないからうまく引っかかったのだと言わんばかりで，牧師補はすっかり興ざめして，伝声管を取り払ってしまう。一，二日後，チャンドルから来て欲しいという知らせが届くが，さすがに行きづらく，翌日になりようやく出かけると，彼を迎えたのは見知らぬ女で，チャンドルは2時間前に亡くなったと伝える。この前の日曜に教会へ遅れまいと年齢も考えず急いだ為に心臓が悪くなり，寝込んでいたのだと言い，更に牧師補はきっと約束を守って来てくれると待ち焦がれていたが，ほかのもっと困っている人の用があるのだろうからと，くり返し呼びに行くのは許さなかったと言う。更に病気のため次の日曜に行かないと牧師補を傷つけることになり，自分が怠慢だと思われるのではないかと心配していたことと，年寄りをいやがらず金持と分けへだてをしない本当の友達を得たと喜んでいたことをその女は伝え，またなけなしのすべての家財を彼に贈るという老婆の遺した書き置きを渡す。茫然として外へ出た牧師補の目は涙

にぬれていたが，やがて道にひざまづき，手で顔をおおってしばしそのままの姿勢を保つ。

この短篇を作品集に入れなかったばかりか，生前雑誌掲載すらしなかったのは，ハーディが宗教界や読者大衆に遠慮した為だったのであろう。1929年の限定版刊行の際，ハーディの遺言執行人の１人が反対をとなえた理由たるこの作品の「ユーモア」[2)]というのも，宗教界への揶揄という意味なのであろう。確かに厳格な宗教人には，説教壇をハンカチがひらひらするという描写は瀆神的かもしれないし，説教者が説教しながらにおいを分析するというのはけしからぬ話かもしれず，またその為に説教がはし折られたり，牧師補の熱意が冷却したりするのは許し難いことかもしれない。しかしハーディのこの若い牧師補への態度は決して冷笑的ではなく，むしろ暖かく好意的である。身銭を切って１人の耳の遠い老婆の為に努力するこの聖職者の善意と熱意と使命感を作者は十分に評価していたに違いないし，このような宗教人の輩出することを彼は願望していたはずである。しかし現実にはこの作品の中の年輩の教区牧師のような，無気力で消極的で事なかれ主義の聖職者が多いことをハーディは常に歎いていた。そしてこの牧師の冷やかし的，世間的忠告で若い牧師補は道を踏み外しそうになる。しかし最後の衝撃的事実の認識によって彼は立ち直ることが出来ると作者は考えているのであろうし，読者もまたこの牧師補が，ハーディの言う宗教界の革新をやれる人間であると期待するであろう。

もっともこの牧師補にも弱点はあった。理屈ではわかっていながら感覚に左右されるインテリの弱点である。自己の使命を十分認識しながら，においというこの最も感覚的な不快感をどうすることも出来ない。そこには作者の戯画化の意図もあるのだろうが，人間への，とりわけ知識人への彼の厳しい洞察があるように思われる。宗教者として大成するには，牧師補はこのような感覚を超えねばならないのであろう。

O. ヘンリーやアンブローズ・ビアスのようなどんでん返しの短篇のテクニックをハーディは余り使わないが，この作品では実に巧妙にこのテクニックが用いられている。牧師補も教区牧師もそして読者も最後の１頁になるまで，チャンドルを中々食えない婆さんだと思っている。説教に駆り出そうとする

世間知らずの若い牧師補を困らす為に好き放題の注文をつけ，伝声管をつけられては悪臭を説教壇にわざと吹き込む意地悪婆さんだと思っている。管の口にうっかりハンカチを置いたりしないでくれと言うのも，嫌味な皮肉だと思っている。ところが最後の1頁で意外な事実を牧師補と読者は知らされる。とんでもない思い違い，誤解をしていたことを思い知らされる。それまでコミカルな展開を楽しんできた読者は，最後に強い驚きと衝撃を味わう。長篇と違って印象の薄れ易い短篇を鮮明にするテクニックの一つがどんでん返しだとすれば，この短篇はまさにその典型的作品であった。

The Return of the Native はハーディの傑作の一つであるが，この長篇はいくつもの誤解がからみ合って産み出す悲劇であった。本短篇もまた誤解からくる悲劇であり，誤解がもたらす悔恨がこの作品の一つのテーマであると言えよう。チャンドルが嫌がらせで自分を困らせようとしていたのではなく，自分を真の友と見なし，何としても遅れず教会へ行こうとつとめた結果，病気になり死んだのだという事実を知ったとき，牧師補は自責と悔恨の為にひざまづかずにはおれない。誤解からのどんでん返しは，ここで単なる短篇制作上のテクニックに終らず，作品の中心テーマを形作る。読者は誤解の恐ろしさに戦慄し，誤解への牧師補の自責と悔恨に人間的なものを見出して感動する。

チャンドルは実は誠実な人間であった。彼女が管にハンカチを載せないでくれと言ったとき，それは皮肉ではなかった。家に来てくれと言ったとき，それは甘えではなかった。においを発したのも，ハンカチを吹き上げたのも，いたずら心からではなかった。食事代を受けようとしなかったのも，それは偽善ではなかった。また毎週1回教会へ行っていると言ったのは，本人の言う言葉のあやというより，相手の職業を思って相手を傷つけまいとする思いやりだったのかもしれない。何故なら病気で教会へ行けぬことを，牧師補を傷つけることになるのではないかと心配するデリカシーを彼女はもっているからである。そして自分よりもっと彼を必要とする気の毒な人がいるのだろうと思って，使いをくり返し送ることなく死んでいく。それは伝声管を取り払ったあと，さすがに牧師補が彼女と顔を合わせるのをためらっていた頃であった。ハーディは親子の間の誠実，夫婦間や愛人間の誠実，友人同士の誠実はくり返し扱ったが，本作のように，いわば人間と人間の間の誠実（聖職

者と信者の間の誠実というよりもっと根元的なもの）を扱ったことは少ないように思われる。しかもその誠実はAのBへの一方的善意熱意と初め見えながら，実はBのAへの一方的心づかい信頼感であって，それがAを大きく包み込んでいたというところに，この短い作品の印象的である所以があるのだろう。この作品集の編者はノートの部分で，人間性への深い敬意という点で本篇をハーディの最上の作品の一つと見ているが[3]，それは決してほめすぎではないだろう。

§2　"Destiny and a Blue Cloak"

ハーディの文名を高めた *Far from the Madding Crowd* が書かれた1874年にこの短篇はニューヨーク・タイムズで発表されている。短篇では彼の書いた最初のもので，22頁，普通の長さである。作者自身が出来栄えに不満であり，また最後の馬車のトリックがハーディの次の長篇 *The Hand of Ethelberta* で使われたこともあって，作品集の中に収められなかったのだろうと考えられている[4]。粗筋を見よう。

アガサは，近隣で評判の美人フランシスと一緒に外出する。途中で別れて町の遊歩道を歩いていると，一人の青年がフランシスと名を呼んでアガサに挨拶する。フランシスと同じ青いマントを着ていた為に起った勘違いだとわかって，アガサはそれを言おうとすると，青年はあなたに会いたいと思っていた，あなたの美しさは日頃聞いていたと話し出す。アガサの方は実はこの青年を以前から知っていて秘かに恋していたのであり，それにフランシスがこの知的な青年に関心を寄せているということを彼女は気付いていて，その競争心からも間違いの事実を打ち明けられない。そのままずるずると日暮れまで一緒に時を過ごす。帰りの乗合馬車の中でこの青年オズワルドがとても楽しかったと言ったとき，ようやく彼女はフランシスでないことを白状し，言えばあなたを失ってしまうと思って今まで言えなかったと，自分の想いまで告白してしまう。ところがオズワルドは名前は違ってもあなたに違いはないと言ってキスをする。するとほかに相客はないと思っていた後部座席から一人の女が降りて行き，御者に聞くとフランシスであったと言う。すべて聞

かれていたことにアガサは気もそぞろになるが，オズワルドは気にすることはないと言う。こうして二人の交際が始まる。オズワルドは試験に首席合格してインドへ赴任することになり，帰国したら結婚することを約束して出発する。アガサは水車小屋をやっている叔父に子供の頃から引き取られていたのだが，この叔父がフランシスと再婚してオーストラリアへ移住することになる。そうしたときフランシスの遠縁に当る農場主で65歳ばかりのロービルが叔父の家を訪ねて来てアガサを見そめ，夢中になり，やがて叔父を通して求婚してくる。叔父は借財のこともあり，アガサに強くこの結婚を勧め，これまで養育してきたことを恩着せがましく持ち出し，オズワルドの帰国など当てにしていてもだめだと言う。アガサは密かにオズワルドに連絡し，彼から叔父のオーストラリア行きまでに必ず帰国するという返事を受けるが，一方叔父とロービルは教区牧師まで巻き込んで，その日限までに帰国がなければ直ぐロービルと結婚式を挙げるという約束をアガサにさせる。ロービルはすっかり有頂天だが，アガサはオズワルドの帰国を信じて落ちついている。やがて叔父とフランシスの結婚がおこなわれ，アガサの約束の日が近づくが，インドから音信はない。アガサもさすがに不安になるが，遂に約束した挙式の前夜になる。万一のことを考えて彼女はロービルを好きになろうと努力したが，中々そうはいかない。窮余の策に，水車小屋の雇人で彼女に好意的な耳の遠い少年と翌朝早く脱出する計画を立てる。朝まだ暗いうちにアガサは粉を積んだ馬車にこっそり隠れ，少年が10マイル離れた駅まで運ぶという策である。翌朝うまく乗り込み，馬車は動き出す。ほっとしたアガサは，前夜緊張して眠れなかった為うとうとする。ふと気が付くと馬車は方向転換して道をあと戻りし始めるので驚いて少年の肩をたたくと，ふり返った顔は少年ではなく，不気味に笑うロービルその人である。前夜の少年への指示を盗み聞いてその計画の裏をかいたのはフランシスであり，ロービルとアガサの結婚の御膳立てをしたのも彼女であった。その日遂に式を挙げたあとのアガサの前に青いマントを着て現われたフランシスは，その朝アガサが粉の馬車で出たあと，急病で到着の遅れていたオズワルドが駆けつけたが，アガサは婚約者とドライブに行ったと言うと青ざめて立ち去ったと伝える。

筋はかなりこみ入っていて，百年以上前の作品相応の古めかしさを感じな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いではないが，唯，短篇にあり勝ちな，長篇のダイジェスト版的な感じはなく，一つ一つの場面は要約的ではないきらめきをもっている。初めて見たアガサの水面に写った姿にロービルが一目ぼれするところや，ぬっと側に立った彼に驚いて，すすいでいた洗い物を流し，彼がステッキの先で拾い上げたのがシュミーズであることを知られると，顔を赤らめ逃げ出すアガサのういういしさなど，光る場面があちこちにある。

このういういしい女が，結婚の約束を叔父達にさせられると，今度は逆証文を相手に書かせる早業を見せて，これはいくらか策に溺れ過ぎの感じもあるが，特に彼女が友人フランシスへの対抗心から，一層オズワルドに興味を抱くのは，ユーステシアを思い出させて，これはハーディ女性の一つの典型である。このアガサの競争心対抗心以上に読者の目を引くのはフランシスの復讐である。それはハーディ・ウーマンには珍しい執念深さであるが，アガサの恋は発端が発端だけに，審美的にもすんなり幸福に収まるわけにはゆかないものであった。ともあれこの二人の女は初期の作品ながら女心のあざとさをビビッドに見せてくれる。すでに長篇第一作から女性描写に秀でていたハーディの面目がうかがわれる作品と言うことが出来る。

次の問題点は作品の標題が示す青マントの運命性ということである。アガサがフランシスにせり合う気持から同じ青マントを着たことを起点として，一切が展開する。すべての物体に重心があるように，この物語の全重量のかかる一点があるとすれば，それはまさにこの起点にある。ハーディの運命主義的な考え方と因果律的思考が，34歳のときのこの短篇にも明確に打ち出されているのである。

もう一つ注目したいことは結末部分のアイロニカルな展開である。アガサが切羽詰って必死の思いで脱出したあとにオズワルドがたどり着く。馬車で逃げ出すというような「あがき」をしなければ別の世界が開けた筈である。フランシスのオズワルドへの説明，「今日式を挙げることになっている婚約者とドライブに出かけた」(p. 40) という説明は痛烈である。オズワルドの受けた打撃が痛烈であるだけでなく，その説明がまさにその通りであるという皮肉さが痛烈である。人間の懸命な営み，必死のあがきは幸福に通じるかもしれないし，更に深い運命のおとし穴にはまり込む原因となるかもしれないというハーディの世界観が，ここに明確に打ち出されているのである。

§3　"The Doctor's Legend"

短篇集 *A Group of Noble Dames* の為に書いたのに，ハーディが結局この作品をそこへ入れなかった理由として，lady を主役にすることが出来なかったことと，モデルになっている地方の名家への遠慮が挙げられている[5]。とにかく1891年アメリカの雑誌に発表されて，その後全集には入れられなかった9頁から成るこの短篇の筋を追ってみよう。

邸の25歳の当主は野心家の冷酷な男で，特に自分の土地の中へ人の入るのを厳しく監視した。近くに貧しい女が一人の女の子と暮らしており，その子が花を摘みに邸の土地の中に入ることがあって，男は腹を立てており，母親に苦情の手紙を書いたが，その数日後またもその子が入り込んでいるのを男は見つける。男はステッキを振り上げて追いかける。子供は悲鳴を上げて逃げ回る。追いつめてスカートをつかむと，子供は一層おびえてスカートを男の手に残したまま逃がれ，しかしてんかんを起こして倒れる。男は苦り切って子供を家へ返さすが，子供はそのときの恐怖の為やがて髪と歯がすっかり抜け落ち，見る影もなくなる。母親は意を決して邸へ談判に行くが男は会ってくれず，5シリングの見舞金を寄こす。彼女はそれを投げ返して帰る。子供は「しゃれこうべ」というあだ名が付き，母親の恨みは一層つのるが，男の方は順調で，結婚し幸福である。ある夕暮れ満月の光が東から射しているとき，墓地のあたりで子を連れたその母親は邸の新妻が一人で歩いているのを見て，子供の頭巾を取り歯ぐきをむき出させて，墓地の塀越しに顔だけ出るように子供を差し上げる。新妻は悲鳴を上げてその場に気絶する。彼女は妊娠中であったのでその結果が心配されたが，翌春無事男児が誕生する。男は親類の死で莫大な財産を得て，また系図を作り上げ，近くの僧院と地所を買い取り，地方随一の大地主となり，遂には受爵までする。一人息子も成人し，才色優れた女性と結婚する。順風満帆のこの一族に対し，あわれな母子の方は恨みの内に相次いで死ぬ。大地主は村を遠くに移転移築しそこに教会まで作って，村人を邸の方へは近付けないようにする。村人が僧院の鐘の音をなつかしがって近付くと，今度は鐘を処分して村人を悲しませる。そうし

た頃に男の妻は亡くなるが，男は僧院を打ちこわし代々の修道僧の墓をあばいて邸の新築に熱中する。息子は父のこんなやり方に神経を病む。息子の新妻は彫刻をやるので，工事場で発掘した頭骸骨を仕事のモデルに義父からもらい受ける。若夫婦がロンドンの家に帰ったある夜，息子は酒を飲んで遅く戻る。妻が未だ仕事部屋にいるかと，ろうそくをかざして覗くと，そこにしゃれこうべを見る。彼は恐怖に駆られて家を飛び出し，「前に見たことがある，どこだったか，いつだったか」(p. 49) と狂ったように叫ぶ。翌朝彼はピストル自殺をする。人々は父親の悪行の報いだと言い，あと継ぎを失った男自身もやがて死んで，一族は滅び去る。

"A Few Crusted Characters" がそうであったように，この短篇も語りの形式で，標題の示す通り医師の語る昔話である。そしてこのような語り形式であることで，前後30年近い時間の経過を含むという，短篇としては極めて危険な方法も，本作では容認されるであろう。しかもこの時間の経過ということが実は本篇では重要な意味をもつ。その時間を経て因果応報が実証されるからである。30年前のあこぎな行為があと継ぎの自殺，一族の衰滅に通じるという罪の報いである。作者自身が本作末尾で'retribution'という言葉を使っているが，一方ハーディ文学で応報思想の最もはっきり出ていたのは *Tess* であった。女主人公の不幸が豪族であった祖先の犯した罪の報いであったと言わんばかりの叙述がこの長篇でくり返される。それは東洋的，あるいは仏教的とさえ言えるような因果応報観であった。そして時期的にこの長篇と並行して書かれた本短篇の主題が応報思想であるとしても不思議ではない。結末部分で「それ悪をおこなう者の裔（すえ）はとこしえに名を呼ばるることなかるべし」という旧約イザヤ書14章のあたりが引き合いに出されている。そして息子が妻の仕事部屋のしゃれこうべを見て「いつどこで見たのか」と口走りながら家を飛び出すクライマックスで，読者は宗教と迷信の狭間の不気味な境地に誘い込まれ，30年前の母子の怨念の遂に晴らされた因果応報を思い知らされる。もとより，母親の胎内にあったとき，墓地の塀のところで見たのであることを，作者はここで言っているのである。

長篇 *The Woodlanders* 47章の man-trap の描写は生々しかったが，土地への侵入者に対する英国領主階級の敵意は異常に大きい。R. A. Firor の *Fol-*

kways in Thomas Hardy によると，この「人捕りわな」という残酷な仕掛の使用は1827年まで許されており，その後も使われていたという[6]。実際ロレンスの *The White Peacock*（1911）2部1章にも森の中で「人捕りわな」にかかり怪我をした侵入者のことが出てくるが，この作品の見張り厳しい森番 Annable は確かに *Lady Chatterley's Lover*（1928）の Mellors の原型である。ハーディとロレンスが，土地所有階級の自己防御の為の残酷な仕置きや私刑に，共通して強い関心を寄せていたことは間違いない。花摘みに入った幼女を杖を振り上げて追い回す地主の姿は，ハーディが少年の日から抱いていたはずの，持てる者と持たざる者の間の苛酷な関係に対する不条理感を象徴するものであっただろう。そしてこの地主の民衆排除の姿勢は30年を経ても一貫して変ることなく，村を移転させ，修道院をこわし，墓をあばいて，民衆の接近のあらゆる機会を拒否する。ハーディはこのような特権階級の驕慢に，時に皮肉を浴びせ，時に筆誅を加える。ここがこの小品の第二の注目すべき点であろう。

§4　"An Indiscretion in the Life of an Heiress"

これは前述の3篇に比較してずっと長く62頁の中篇で，1878年英米両国の雑誌に発表，1934年にはハーディ未亡人が100部限定版を出している[7]。全集には入れられていなかったが，先の3篇と違って従来から比較的知られてきたのは，ハーディの日の目を見ることのなかった最初の小説との関連の為である。粗筋を大づかみに見よう。

村の小学校教師である青年と地主の娘との出会いは，新しく村に入った脱穀機に娘が危うく巻き込まれそうになったところを青年が助けたことで始まる。学校の経営者でもある父の代理でやって来る娘に，青年はときどき学校で会い親しくなる。そうしたとき地主は土地を広げる為に，青年が同居している祖父の家の立ち退きを求め，祖父はそのショックでがっくり落ち込む。青年は娘にその拡張計画をやめさせることを頼み，娘の恩人の頼みとなれば地主も承知する。そうしたとき青年は衝動的に娘にキスをしてしまう。青年がその行為を謝りに行くと，娘は1か月の予定で遠くの親類の訪問に出かけ

たとのこと。そしてその間に例の拡張計画が再燃してくる。祖父の再度の落胆に，娘の帰宅を待って青年が誠意を込めた弁明と説得をすると，娘は計画を中止させる努力をやめにしただけだったのだと言い，撤回させることを約束する。そうした頃祖父は大怪我をしてそれが原因で死ぬ。娘は死の原因が自分の与えた落胆のせいではなかったかと気にし，それがきっかけになって二人は互いの愛情を確かめ合うことになる。しかし身分の隔たりを強く意識している青年は，都へ上りそこで出世しようと決心し，娘に送られて村を出る。5年の精進が実って青年はロンドンで文筆家としてかなりの名声を上げる。別れてから初め二人は文通をしていたが，あるとき娘は父にそれを発見され，外国へやられ，以来音信不通となる。ある日青年はピカデリーで娘が馬車で通るのを見かける。都で社交の日々を送っているのだと思うと青年は気遅れして，彼女のロンドンの別邸を訪れることも出来ない。ある晩その付近をうろうろしているとメサイアの中のあるメロディのピアノの音が邸内から聞こえる。青年は次の週にメサイア演奏会があることを思い出し，娘がそのことを思ってピアノを弾いているのであり，演奏会に行こうとしているのだと，これはポーの主人公がやるような推理をする。切符売場で娘の家の名前で予約してある席の近いところを，と申し込むと，あて推量が当って，そのような席の予約をすることが出来る。当夜，連れ二人と現われた娘の後のあたりに坐っていた青年は，全員起立のハレルヤ・コーラスのとき，音楽に感動して涙を流している娘の名を後から呼び，手を握り，夜12時に会う約束をさせる。深夜彼女の邸の前に待っていると，ドアの下からそっと手紙が出される。音楽の力に酔って会うとは言ったが，5年の間に自分は変った，世間の常識を無視することは出来ないと書いてある。自棄になった青年は一晩中街を歩く。翌日の新聞には青年の著書の好評と娘の婚約成立の報道が載っている。心身の疲労から立ち直る為に帰郷した青年は村に下宿したが，やがて娘の結婚式のうわさを聞く。明日は挙式だという前夜にたまらず教会へ行くと，そこで娘に会う。彼女は，実は相手の男を愛していないが，もう仕方がないのだと言う。その夜中，青年が思い乱れて夢うつつのとき，女が結婚を逃がれる為に家を出て来たと，彼の下宿へ駆け込む。青年は明け方から大活躍して手続万端を取りつけ，密かにこの隣り村で二人だけの結婚式を挙げ，その日のうちに町まで出る。町の宿で3日目に見た新聞には彼らの駆け落ち

の記事が出ている。ロンドンへ早く行くことが第一と思われたが，父親のことをこだわっている娘の心を察した青年は，出来ればその許しを得てからにしようと提案して，村の方へ二人は密かに戻る。手筈を決めて娘が先ず家に入り，それから青年を呼び入れることにする。緊張して入って行った娘からは連絡が来ず，やがて来た知らせは娘が内出血で倒れたことを伝える。看病の甲斐なく3日目に彼女は死ぬ。

長篇 *Two on a Tower* のヘロインも最後に心臓麻痺の発作で死ぬが，このあたりも現代の小説を読み慣れた目には，古めかしさを感じざるを得ないところであろう。唯，中篇であるだけに，先の三篇と違い作者は相当に書き込んでおり，ハーディらしい叙述，描写が目につく。例えば冒頭の教会会衆の描写，青年の視線の動きにつれてのヘロインの描写，新式脱穀機の村への導入，終身借地権の問題，作品展開に重要に働く音楽の感動性あるいは魔力性，これらはハーディがしばしば見せた手法上の特徴であり，しばしばおこなった問題の提起であった。とりわけメサイア演奏会の場面は物語のクライマックスで，これは発表されることのなかったハーディの最初の長篇の推定されるプロットのクライマックスにも使われていたと考えられている。

その世に問われることのなかった "The Poor Man and the Lady" と現存の処女作 *Desperate Remedies* 及び本中篇の綿密な比較検討をしたのは，Dr. Rutland で，発表されなかった長篇についてのメレディスの「プロットを複雑化すること，社会主義的色彩を緩和すること」という二つの助言のうち，前者は処女長篇に後者は本中篇に取り入れられたとする彼の見方は説得的である[8]。19世紀という時代は割引いても，出版を断わられた習作長篇の政治的色彩は相当のもので，推定されるプロットでは，主人公はトラファルガー広場で政治演説をしたりする。そして実は本中篇でも二人の主人公の階級差の問題が異常な程にくり返し言及される。ところが注意して見るとそれらは政治的，主張的と言うより，心理的，心情的なものなのである。例えば教会で青年は，見そめた娘の横顔がその上にある大理石で出来た彼女の祖先の像と似ていることに身分の違いを感じ，自分に彼女がはきはき物を言うのは，自分の身分を教員風情と見ているからだと悩み，ディナーに正式の服装をしたこともなく，馬車を使ったこともない自分を意識し，文学で彼女を教える

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com